
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「接続する海としての地中海」第一回会議報告

文責 篠田知暁

2022年6月14日日本時間16時より、共同利用・共同研究課題「接続する海としての地中海」2022年度第1回研究会を開催した。当初はバイルートのJaCMESとオンラインのハイブリッドでの開催を予定していたが、参加者の希望によりオンラインのみでの開催となった。参加者は、Felix Arnold (German Archeological Institute Madrid)、Abderrahim Benhadda (Doha Institute for Graduate Studies)、Georg Christ (University of Manchester)、押尾高志 (西南学院大学)、熊倉和歌子 (東京外国語大学)、黒木英充 (東京外国語大学)、深見奈緒子 (日本学術振興会カイロ研究連絡センター)、篠田知暁 (東京外国語大学) である。なお、Benhadda はネットワークの接続の問題により、途中退出した。

最初に参加者自己紹介をした後、篠田より本課題について改めて説明と確認を行った。その後、本課題において行う研究の見直しについて、それぞれスライドなどを利用して説明した。篠田は、16世紀末から17世紀初頭モロッコに捕虜として滞在したポルトガル人貴族によるサアド朝スルターンの年代記をもとに、イベリア半島とモロッコの国家間外交とそのエージェントの働きについて調査する。黒木は18世紀末から19世紀のアレppoを訪問したヨーロッパ人の記録を、シリアに関する地域研究の嚆矢と位置付ける。Arnold はスペインのイスラーム建築では例外的に正方形の間取りを持つ、グラナダ・アルハンブラ宮殿のメッシュアル室と呼ばれる区画に注目し、その影響の起源を東方に探る。Christ はイタリアとエジプトの外交文書などを基に、地中海世界という枠組みの見直しを行う。深見はナポレオン遠征時に作成されたカイロの古地図を基に、街区における袋小路の役割について分析する。熊倉は中世地中海史の研究に環境史の視点を取り入れ、人々が環境的な条件にどのように適応して農業生産を行い、それが土地制度の在り方を方向付けたかを、特に農業技術に焦点を当てて論じる。押尾は初期近世にイベリア半島を追放されたモリスコが残した、アラビア文字で書かれたスペイン語であるアルハミア文献の分析を通じて、イスラームに関する知識の伝達を論じる。

最後に、次回ワークショップの時期(3月)、担当者(篠田、Arnold、Christ)と開催場所(バイルートJaCMES オフィス)を決定し、解散した。